

[研究ノート]

## コンラート・ツェルティスの*Germania illustrata*構想と 知識人ネットワーク

Das Projekt ›*Germania illustrata*‹ des Konrad Celtis  
und das Netzwerk der Gelehrten

田中 圭子  
TANAKA Keiko

### はじめに

コンラート・ツェルティス（1459年生～1508年没）は、近世の神聖ローマ帝国における代表的な人文主義著作家のひとりである<sup>1</sup>。イタリアと東欧、帝国内の各地を遍歴する一方で、1486年には、ハプスブルク家の神聖ローマ皇帝フリードリヒ3世から桂冠詩人として戴冠された。1492年からインゴルシュタット大学で、1497年からヴィーン大学で教鞭を執っているが、彼をヴィーンに招聘したのは、フリードリヒ3世の息子であったローマ王（1508年より神聖ローマ皇帝）マクシミリアン1世であった。この君主のもとで展開された学芸に関わる諸活動を政治との関連から分析しようとする問題関心から、筆者はツェルティスがヴィーン滞在時代に執筆・出版したラテン語劇を取り上げ、その中に表現された思想についての考察を行ってきた<sup>2</sup>。

しかし、人文主義者ツェルティスの活動は、もとよりハプスブルク家の宮廷周辺での仕事のみにとどまるものではない。そこで本稿では、ツェルティスが自身の代表的著作のひとつとするべく構想しながら未完に終わった、ドイツの地誌と歴史の総合的叙述からなる『ゲルマーニア案内 (*Germania illustrata*)』の出版計画を取り上げ、彼を中心に構築され、帝国内外に広がっていた知識人ネットワークとの関わりを明らかにすることとした。

---

<sup>1</sup> ツェルティスの活動と著作については、Dieter Wuttke, "Conradus Celtis Protucius", in: Stephan Füssel (hrsg. v.), *Deutsche Dichter der frühen Neuzeit (1450–1600). Ihr Leben und Werk*, Berlin, 1993, S.173–199; Jörg Robert, "Celtis (Bickel, Pickel), Konrad (Conradus Celtis Protucius)", in: Franz Josef Worstbrock (hrsg. v.), *Deutscher Humanismus 1480–1520. Verfasserlexikon*, Bd.1, Berlin, 2008, Sp.375–427.

<sup>2</sup> 拙稿「コンラート・ツェルティスの『ディアーナ劇』とマクシミリアン1世」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』51巻、2014年、43～57頁。拙稿「コンラート・ツェルティスの『ラブソーディア』－16世紀初頭のハプスブルク宮廷における人文主義」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』52巻、2015年、183～194頁。

## 1 研究の視角

ツェルティスの『ゲルマーニア案内』に関する20世紀以降の研究においては<sup>3</sup>、ドイツを対象とした歴史・地理の叙述である点が注目を集め、ナショナルな「ドイツ意識」の表現としての位置づけがなされてきた。またその一方で、『ゲルマーニア案内』と共通する題材を用いて執筆された著作、関連する言及を含む詩や書簡などに基づいて、ツェルティスの構想の具体的な内容や発展過程の解明も試みられてきた。

先行研究が示している通り、『ゲルマーニア案内』構想の中にドイツ的なるものへの強い関心が表れていることは確かだが、本稿においては、従来とは異なる視角からこの構想を扱うこととしたい。ツェルティスの著作におけるドイツ概念を研究したG.M.ミュラーは、『ゲルマーニア案内』の実現に向けて協力した知識人たちの存在をふまえて、その仕事が”Gemeinschaftsaufgabe”（共同体の任務）であったと述べている<sup>4</sup>。ここでは、程度の差はあれドイツ概念を共有する共同体の存在が想定されているといえようが、何らかの意識の共有をベースに、知識人層が集団として創造的活動に関与している状況自体も注目に値する。ここでは、その実態の把握を目指し、まず『ゲルマーニア案内』構想について、着想源やモデルとみなされている古典や同時代の作品にも触れつつ、先行研究の成果を整理して述べる。次いでツェルティスを中心とするネットワーク構築と、『ゲルマーニア案内』構想に関連する人的ネットワーク活用の試みについて触れる。

## 2 『ゲルマーニア案内 (Germania illustrata)』構想

古代から現代に至るまでのドイツの歴史を著述する着想をツェルティスが得たのは、イ

---

<sup>3</sup> Paul Joachimsen, *Geschichtsauffassung und Geschichtsschreibung in Deutschland unter dem Einfluss des Humanismus*, 1. Teil, Leipzig, 1910, S.155-195; Jacques Ridé, "Un grand projet patriotique: *Germania Illustrata*", in: *L'humanisme allemand (1480-1540). XVIIIe colloque international de Tours*, München, 1979, pp.99-111; Gernot Michael Müller, *Die "Germania generalis" des Conrad Celtis. Studien mit Edition, Übersetzung und Kommentar*, Tübingen, 2001 (以後、"*Germania generalis*"と略記する); id., "*Germania illustrata, quae in manibus est*. Spurensuche nach einem nie realisierten Werk des Konrad Celtis", in: Gesa Büchert / Claudia Wiener (hrsg.v.), *Amor als Topograph: 500 Jahre Amores des Conrad Celtis. Ein Manifest des deutschen Humanismus*, Schweinfurt, 2002, S.137-149 (以後、"*Germania illustrata*"と略記する); Ulrich Muhlack, "Das Projekt der *Germania illustrata*. Ein Paradigma der Diffusion des Humanismus", in: Johannes Helmuth, Ulrich Muhlack, Gerrit Walther (hrsg. v.), *Diffusion des Humanismus. Studien zur nationalen Geschichtsschreibung europäischen Humanisten*, Göttingen, 2002, S.142-158; Christopher B. Krebs, *Negotiatio Germaniae. Tacitus' Germania und Enea Silvio Piccolomini, Giannantonio Campano, Conrad Celtis und Heinrich Bebel*, Göttingen, 2005; Gernot Michael Müller, "Germania Illustrata", in: Friedrich Jaeger (hrsg. v.), *Enzyklopädie der Neuzeit*, Bd. 4, Stuttgart-Weimar, 2006, Sp.555-557.

<sup>4</sup> "*Germania generalis*", S. 465ff. U.ムーラックは『ゲルマーニア案内』構想について、"ein Gemeinschaftswerk des deutschen Humanismus"（「ドイツ人文主義共同体の仕事」）と述べている。Muhlack, op.cit., S.146.

ンゴルシュタット大学に着任した1492年頃と推測されている<sup>5</sup>。翌年の11月、ツェルティスは7月に刊行されたばかりのハルトマン・シェーデルの『世界年代記』について、新版に向けた改訂編集の仕事を引き受け、契約を交わした<sup>6</sup>。依頼主は、この年代記の出版に出資したニュルンベルク市民ゼーバルト・シュライアーであった。結局この仕事は完了せず、新版出版計画も断念されたが、ツェルティスにとっては、この大部なラテン語史書の出版事業に関わったことは、歴史を扱う自著の公刊計画をより具体化させる契機になったようである。

その後ツェルティスは、ニュルンベルクの地誌を叙述した全16章からなるラテン語散文作品『ニュルンベルク』<sup>7</sup>を上梓した。初稿の完成は1494年、その翌年に手稿本をニュルンベルク市当局に献呈している。1500年には、ツェルティスが編纂したタキトゥスの『ゲルマーニア』の付録として、この書の第3章のみが出版された。全文が印刷されたのは、1502年発行の『愛の四書』との合本版においてである<sup>8</sup>。『ニュルンベルク』第1章において『ゲルマーニア案内』というタイトルへの言及が登場するが<sup>9</sup>、ニュルンベルクの地誌と『ゲルマーニア案内』は内容的に相互に結び付いており、前者は後者に含まれる題材の一部を先行して公刊したものとみなしうる。

同様に『ゲルマーニア案内』構想と関連する著作として、『ゲルマーニア概要 (*Germania generalis*)』<sup>10</sup>をあげることができる。これは全7章、283行からなるラテン語

<sup>5</sup> この年に印刷された著作（インゴルシュタット大学での演説とバイエルン公フィリップへの頌詩）の中に、後に『ゲルマーニア案内』に発展するコンセプトが表れていると指摘されている。“*Germania generalis*”, S.224f.; Muhlack, op.cit., S.143; Robert, op.cit., Sp.394.

<sup>6</sup> 契約書の翻訳が以下の文献に掲載されている。エイドリアン・ウィルソン、河合忠信・雪嶋宏一・佐川美智子訳『ニュルンベルク年代記の誕生』雄松堂出版、1993年、247頁。なお、シェーデルの『世界年代記』は、英語圏では『ニュルンベルク年代記 (*The Nuremberg Chronicle*)』として知られている。初版はラテン語であり、後にドイツ語訳も出版された。

<sup>7</sup> 原題は『ニュルンベルクの起源、地勢、慣習および機関についての書 (*De origine, situ, moribus et institutis Norimbergae libellus*)』。この著作の成立過程、各版については、Klaus Arnold, “Konrad Celtis und sein Buch über Nürnberg”, in: Stella P. Revard / Fidel Rädle / Mario A. Di Cesare (ed.), *Acta Conventus Neo-Latini Guelpherbytani. Proceedings of the Sixth international Congress of Neo-Latin Studies*, Binghampton, 1988, S.7-15; Robert, op.cit., Sp.395f.

<sup>8</sup> この版は、『愛の四書』、『ゲルマーニア概説』、『ニュルンベルク』、『ディアーナ劇』などを合わせ、マクシミリアンへの献辞を付して刊行されたものである。Conradi Celtis, *Quatuor libri amorum secundum quatuor latera Germaniae feliciter incipiunt ... (etc.)*, Norimbergae, 1502. オーストリア国立図書館所蔵の刊本を参照した。

<sup>9</sup> 「(現在) 手がけているゲルマーニア案内の出版に先立つ、一種の前置きにして才気ある試作のような(もの)」“tanq[ua]m praeludiu[m] quodda[m] et ingenii experime[n]tu[m] ante editione[m] illustratae Germaniae, quae in manibus est,” *Ibid.*, fol.81r.

<sup>10</sup> 『ゲルマーニア概要』のラテン語テキストとドイツ語訳は、以下に収録されている。“*Germania generalis*”, S.89-109. テキストの概要と成立過程、各版の比較については、*Ibid.*, S.3-82; Robert, op.cit., Sp.397-399.

韻文作品であり、タイトルが示すとおり、ドイツの起源や地理などについてコンパクトに語る内容となっている。『ニュルンベルク』と同じく、1500年刊のツェルティス編『ゲルマーニア』に収録された。1502年に出版された『愛の四書』との合本版では、ローマ王マクシミリアンに宛てられた韻文8行からなる序文が追加されており、その中で、いずれマクシミリアンに完成された『ゲルマーニア案内』が献呈されると述べられている<sup>11</sup>。よって『ゲルマーニア概要』は、『ゲルマーニア案内』の予告のような性格をもつ作品といえるだろう。

上記2作品等と合わせて1502年に刊行された『愛の四書』<sup>12</sup>は、ツェルティス自身が投影された詩人の生涯を物語るラテン語韻文作品である。これを構成する4つの書物は、主人公が遍歴するドイツの4方位、東西南北それぞれで出会う4人の恋人、人生の4時期に対応しており、登場する諸地域の地誌的叙述をふんだんに含んでいる点が特徴とされる。したがって、この作品も『ゲルマーニア案内』構想と密接な関連のもとに執筆されたと考えられている。

これら派生作品を生んだ構想の発想源やモデルとして、主に先行する三つの作品がツェルティスに影響を与えたと指摘されている<sup>13</sup>。

まず第一に、ボッカッチョらイタリアの人文主義者によって再発見され、15世紀半ば以降ドイツの知識人の間でも広く知られた、タキトゥスの『ゲルマーニア』があげられる。ツェルティス自身がこの著作を編纂し、自作と合わせて出版したことは前述の通りであり、タキトゥスが描いた古代ゲルマン人のプリミティブなイメージに、現今のドイツの情報と文化的創造の担い手としてのイメージを加えて補完し、ドイツの歴史的発展を示すことがツェルティスの意図であったといわれる<sup>14</sup>。

第二にあげられるのは、15世紀半ばに活躍した人文主義者エネア・シルヴィオ・ピッコローミニ（1405年生～1464年没。1458年より教皇ピウス2世）の著作である<sup>15</sup>。1442年末頃より10年以上にわたってフリードリヒ3世の宮廷で働いていたエネア・シルヴィオが、

<sup>11</sup> 「全ゲルマーニア案内が貴殿マクシミリアンに捧げられるまで、このささやかな書をお読みになれますように」 "Haec rogo pauca legas donec germania tota / Illustrata tibi Maximiliane detur." Celtis, *op.cit.*, f.73v.; "Germania generalis", S.90.

<sup>12</sup> 注8参照。原題は『ゲルマーニアの四方位をめぐる愛の四書 (Quattuor libri amorum secundum quattuor latera Germaniae)』。この作品については、Büchert / Wiener (hrsg.v.), *op.cit.*; Robert, *op.cit.*, Sp.401-404.

<sup>13</sup> Ridé, *op.cit.*; "Germania generalis", S.233-267; "Germania illustrata", S.138-140, 144f.; Muhlack, *op.cit.*, S.148-152; Robert, *op.cit.*, Sp.393-395.

<sup>14</sup> 中世・近世におけるタキトゥスの受容に関しては、W. Rüegg, "Tacitus", in: *Lexikon des Mittelalters*, Bd.8, Stuttgart-Weimar, 1999, Sp.400-402; Caspar Hirschi, "Germanenmythos", in: Friedrich Jaeger (hrsg. v.), *Enzyklopädie der Neuzeit*, Bd. 4, Stuttgart-Weimar, 2006, Sp.551-555, bes.551f. タキトゥスの『ゲルマーニア』とツェルティスについては、"Germania generalis", S.436-439.

<sup>15</sup> エネア・シルヴィオ・ピッコローミニの生涯と著作の概要については、Franz Josef Worstbrock, "Piccolomini, Aeneas Silvius (Papst Pius II.)", in: Kurt Ruh (hrsg. v.), *Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon*, Bd.7, Berlin - New York, 2010, Sp.634-669.

1457/1458年に執筆した書簡形式の論文には、当時のドイツの諸都市や諸侯、文化的状況などに関する叙述が含まれており、後にタキトゥスの著作にならった『ゲルマーニア』という表題で知られるにいたった<sup>16</sup>。また、ヨーロッパ諸国の地誌と歴史、同時代の状況を叙述したエネア・シルヴィオの『ヨーロッパ』は、翻案のうえシェーデルの『世界年代記』に収録されていた。新版『世界年代記』の編集作業を依頼されたツェルティスが、この作家の作品を知らなかったはずはない<sup>17</sup>。

第三に、エネア・シルヴィオとほぼ同時代に活動した人文主義者フラヴィオ・ビオンド（1392年生～1463年没）の『イタリア案内 (*Italia illustrata*)』（1447年頃～1453年）<sup>18</sup>の影響も指摘されている。イタリア諸地方の歴史と地理について、古代の作家の作品を引きつつ詳細に叙述した浩瀚なこの書物が、ツェルティスの構想のモデルとなったことは、タイトルの類似からも明らかであろう。なお、ここで両書のタイトルに用いられた *illustrare* というラテン語は、「明らかにする」、「輝かしくする」という意味をもつ。つまり、対象とする地域について、詳らかに解き明かそうとする書物であることが示されていると同時に、その叙述を通じて輝かしい栄誉を与え、称揚することも目指されていたといえる。

しかし、『ゲルマーニア案内』出版計画がそれ以上の進捗をみせることのないまま、ツェルティスは1508年にこの世を去った。追悼のためにアウクスブルクの画家ハンス・ブルクマイルが製作した一枚刷り木版画では、桂冠詩人の月桂冠を戴き目を閉じたツェルティスの半身像が描かれており、重ねあわされた両手は机上の4冊の書物にのせられている。下に置かれた3冊は詩作品（『愛の四書』、『エピグラム』、『頌歌』）であり、それらの上に『ゲルマーニア案内』が載せられている<sup>19</sup>。未完であったとはいえ、『ゲルマーニア案内』は、ツェルティスが生涯にわたって追求した最大最高の目標として記念されているのである。

### 3 「文芸協会」と書簡による知識人ネットワーク

古代から現在に至るドイツの歴史、そしてドイツ全土の地理と文化についての叙述を包含する構想であったと考えられている『ゲルマーニア案内』は、ビオンドの『イタリア案

<sup>16</sup> Adolf Schmidt (hrsg. v.), *Aeneas Silvius, Germania und Jakob Wimpfeling: „Responsa et replicae ad Eneam Silvium“*, Köln - Graz, 1962; Enea Silvio Piccolomini, *Deutschland. Der Brieftraktat an Martin Mayer und Jakob Wimpfelings „Antworten und Einwendungen gegen Enea Silvio“*, übersetzt und erläutert v. Adolf Schmidt, Köln - Graz, 1962; Worstbrock, op.cit., Sp.651-654.

<sup>17</sup> 『ヨーロッパ』とツェルティスについては、“*Germania illustrata*”, S.140-142.

<sup>18</sup> フラヴィオ・ビオンド、黒川正剛訳「イタリア案内(抄)」、池上俊一監修『原典 イタリア・ルネサンス人文主義』名古屋大学出版会、2010年、271～314頁。Ottavio Clavuo, *Biondos “Italia illustrata” - Summa oder Neuschöpfung ?*, Tübingen, 1990.

<sup>19</sup> 木版画中では4冊のタイトルは“AMOR.”, “EPIGRA”, “ODAR.”, “GER. ILLVS.” と記されている。Peter Ruh, *Kaiser Maximilian gewidmet: die unvollendete Werkausgabe des Conrad Celtis und ihre Holzschnitte*, Frankfurt a. M., 2001, S.282-312.

内』と同様に、きわめて浩瀚な大作になるはずであった。しかし、この著作の完成に必要な仕事は、ツェルティスひとりで遂行できるものではなかったであろう。ここでは、その計画を支えたと考えられる人々の寄与について、まずツェルティスのイニシアティブのもとで活動した「文芸協会」<sup>20</sup>、さらにツェルティスと書簡などを取り交わすことで形成された人的ネットワーク<sup>21</sup>という2つの側面から明らかにすることを試みたい。

ツェルティスが帝国各地で「協会」設立を呼びかけたのは、イタリア滞在中に知ったフィレンツェの「プラトン・アカデミー」などの活動に刺激されたためと考えられる<sup>22</sup>。ハイデルベルクでは、ヴォルムス司教ヨハン・フォン・ダールベルクを中心に知識人が集い、ツェルティスは司教を「ゲルマーニア文芸協会」(Sodalitas litteraria per Germaniam)の「長」(princeps)と呼んだ<sup>23</sup>。彼らは議論や交流の場となる会合を開き、名高い蔵書を調査・見学する旅行などの活動を行った<sup>24</sup>。1497年にツェルティスがヴィーンに移った後は、この都市の人文主義者サークルは「ドナウ文芸協会」(Sodalitas litteraria

<sup>20</sup> ツェルティスが創設した「協会」に関する近年の研究は、Moritz Csáky, "Die "Sodalitas litteraria Danubiana": historische Realität oder poetische Fiktion des Conrad Celtis?", in: Herbert Zeman (hrsg. v.), *Die Österreichische Literatur. Ihr Profil von den Anfängen im Mittelalter bis ins 18. Jahrhundert (1050-1750)*, Teil 2, Graz, 1986, S.739-758; Tibor Klaniczay, "Celtis und die Sodalitas litteraria per Germaniam", in: August Buck / Martin Bircher (hrsg. v.), *Respublica Guelpherbytana. Wolfenbütteler Beiträge zur Renaissance- und Barockforschung. Festschrift für Paul Raabe*, Amsterdam, 1987, S.79-105; Heinz Entner, "Was steckt hinter dem Wort ›sodalitas litteraria‹? Ein Diskussionsbeitrag zu Conrad Celtis und seinen Freundeskreisen", in: Klaus Garber / Heinz Wismann (hrsg. v.), *Europäische Sozietätsbewegung und demokratische Tradition. Die europäischen Akademien der Frühen Neuzeit zwischen Frührenaissance und Spätaufklärung*, Bd.2, Tübingen, 1996, S.1069-1101; Harald Dickerhof, "Der deutsche Erzhumanist Conrad Celtis und seine Sodalen", in: Garber / Wismann (hrsg. v.), *op.cit.*, S.1102-1123.

<sup>21</sup> ツェルティスの往復書簡については、以下の刊行版を参照した。Hans Rupprich (hrsg. v.), *Der Briefwechsel des Konrad Celtis*, München, 1934.

<sup>22</sup> ツェルティスは、インゴルシュタットの法学教授であった友人ジクストゥス・トゥヒャーに宛てた1491年の書簡で、プラトン・アカデミー (Academia Platonica) 創立の希望を述べている。*Ibid.*, Nr.17, S.31.

<sup>23</sup> ただし、"princeps"という称号が制度的な意味で用いられていたとは限らない。ツェルティスを含む他のメンバーがこの称号で呼びかけられている例もある。この称号については、Klaniczay, *op.cit.*, S.87f., 95f.; Entner, *op.cit.*, S.1076f.

<sup>24</sup> 蔵書で名高いシュボンハイム修道院長ヨハネス・トリテミウスを訪問した1496年の旅の消息を伝える書簡は、Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.110, 118, 139, S.184-186, 195-198, 227-230.

Danubiana) という名称を用いるようになり、その主要メンバーであったヨハネス・クスピニアンが会合のホスト役を務めていた<sup>25</sup>。また、アウクスブルクにも、人文主義者コンラート・ポイティンガーを中心に協会活動を行うサークルがあった。これら協会は、ツェルティスや他の協会メンバーの著作の出版にも関わっていた<sup>26</sup>。

しかし、各協会の構成員はつねに固定されていたわけではなく、地域ごとに核となるメンバーが存在し、その周囲で流動的かつ緩やかなまとまりをみせていたように思われる<sup>27</sup>。一方、ツェルティス自身は、先に触れた「ゲルマーニア文芸協会」の「長」という呼びかけに窺われるように、各地に「協会」を設立することで、ドイツ全体を覆う「ゲルマーニア文芸協会」のネットワークを創出する構想を思い描いていた節がある。彼の著作の中には4つないし7つの「ゲルマーニア文芸協会」への言及を含むものがあり<sup>28</sup>、前者はライン、ドナウ、ヴィスワ、オーデルが流れるドイツの4地方と関連付けられている。このような「協会」構想は、4方位を連想させる「4」、7惑星やローマの7つの丘と関連付けられる「7」といった象徴的な意味を有する数が用いられていることから、ツェルティスの詩的フィクションとしての色彩が強いとみなされている<sup>29</sup>。とはいえ重要なのは、協会メンバーと自認していた一群の知識人たちが、ハイデルベルクやヴィーン、アウクスブルクなど帝国内の複数の都市を拠点とし、ツェルティスや他のメンバーと連携・協働して、交流・調査・著述・出版といった活動を行い、その成果を残してきたことであろう。

このような協会は、ツェルティスの周囲に成立した交友関係の結節点をなしたといえようが、これらと重なり合いつつ、より広範な人的ネットワークを創り出していたのが、書

<sup>25</sup> ツェルティス没後にクスピニアン家に掲げられた「ドナウ文芸協会」を記念するプレート（ヴィーン市博物館所蔵）には、1506～1508年のメンバー12名の名前が記されている。Hans Ankwicz-Kleehoven, *Der Wiener Humanist Johannes Cuspinian. Gelehrter und Diplomat zur Zeit Kaiser Maximilians I.*, Graz - Köln, 1959, S.89-92. ヨハネス・クスピニアンについては、拙稿「1515年のヴィーン会議における祝祭—人文学者ヨハネス・クスピニアンの「日誌」より—」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』50巻、2013年、45～56頁。

<sup>26</sup> 1502年の合本版『愛の四書』の出版元は「ツェルティス協会 (Sodalitas Celtica)」と記載されている。Celtis, *op.cit.*, f.119v. 1505年刊行の『ラブソーディア』奥付には、ポイティンガーをはじめとする「ドナウ文芸協会」の3名の名前が記されている。

<sup>27</sup> チェスキー・クルムロフに住む詩人が「ドナウ文芸協会」への参加希望を申し出た例もある。Rupprich (hrsg. v.), *op.cit.*, Nr.197, S.328f.

<sup>28</sup> 出版が実現しないまま終わったツェルティスのエピグラム集では、冒頭に「4つのゲルマーニア文芸協会へ」宛てられた作品がおかれている。また、ツェルティスのイニシアティヴで4世紀の作家アウソニウスの作品が1500年に出版されたが、これに添えられた詩は「7つのゲルマーニア文芸協会」と題されている。Klaniczay, *op.cit.*, S.102f.; Entner, *op.cit.*, S.1084-1086; Robert, *op.cit.*, Sp.418f.

<sup>29</sup> Csáky, *op.cit.* この研究では、sodalitasはツェルティスの交友関係全体を表す、との解釈が示されている。また、ブダの知識人サークルによる「ドナウ文芸協会」活動の可能性を示唆している点も注目される。

簡によるコミュニケーションであった。また、知識人が著した書簡は集成されて書籍として刊行されることもあり、当初から出版を意図して書かれた書簡体の著作の例も少なくな<sup>30</sup>い。

ツェルティスも自ら書簡集を編纂・出版する計画をあたためており、彼の生前には印刷に至らなかったが、そのために集められた書簡を筆写した手稿が、オーストリア国立図書館に所蔵されている<sup>31</sup>。だが、「コンラート・ツェルティスに宛てられた文芸協会の書簡と詩の本 (*Libri epistolarum et Carminum Sodalitatis litterarie Ad Conradum Celtem*)」という手稿表題が示す通り、自ら著した書簡ではなく、協会メンバーからの書簡と献呈された詩が集められている点が、他の著作家の例とは異なっている。ここでツェルティスが目指したのは、協会ネットワークの中心的存在として自己を表現することであったと考えられている<sup>32</sup>。この手稿には125名の著者による266通の書簡が含まれており、また、彼自身の手になる書簡なども合わせて1934年に出版された書簡集でも、収録された359通の差出人ないし受取人として名が示される人物は130名ほどである<sup>33</sup>。また、これら書簡の大部分は帝国内の諸都市から発信されているが、ヴェネツィアをはじめとするイタリアの都市、クラクフやブダのような東欧の都市から送られたものも散見される。これらに依拠して、ツェルティスが構築した書簡ネットワークの実態を把握しようと試みた研究によると、人的結合の網の目は必ずしも帝国全土を満遍なく網羅していたわけではなく、往復書簡の密度が高い地域は南ドイツ・オーストリアであると指摘されている<sup>34</sup>。これはすなわちツェルティス自身の出身・居住地が存する地域であり、個人的な交友関係が書簡によるコンタクトの基礎にあることが窺われる。

それでは、こうした人的ネットワークは、『ゲルマーニア案内』のような歴史的・地理的著作の構想・執筆に際して、どのような役割を果たしたのだろうか。書簡を通じて知ることのできる事例によれば、主として資料・情報の収集における寄与が期待されていたようである。ここに、いくつかの具体例を提示してみたい<sup>35</sup>。

<sup>30</sup> 帝国における例としては、エネア・シルヴィオ・ピッコローミニの書簡集が、人文主義的書簡の模範として広く受容されていた。また、彼の著作の中には、『ゲルマーニア』など書簡体を用いたものも多い。Worstbrock, op.cit., Sp.640-646, 651-654, 661f.

<sup>31</sup> Wien, Österreichische Nationalbibliothek, Cod.3448. この手稿について筆者は未見である。

<sup>32</sup> 手稿では、ツェルティスが桂冠詩人として戴冠された年を起点に、年次ごとに書簡が分類されているが、必ずしも時系列に沿って配列されているわけではなく、書簡によっては実際の発信年とは異なる年次に分類されていることもあるという。この書簡集は、意図的に全体を構成しなおしたひとつの作品とみるべき性質をもっているといえよう。Rupprich (hrsg. v.), op.cit., S.V-VII; Dickerhof, op.cit., S.1104-1107; Robert, op.cit., Sp.422f.

<sup>33</sup> Rupprich (hrsg. v.), op.cit. この版では、上述の手稿に収録されている書簡が、ツェルティス自身の書簡やその他の文書を加えられたうえで、実際の時系列順に配列しなおされており、元来の書簡集の構成とは異なるものとなっている。

<sup>34</sup> Dickerhof, op.cit., S.1108-1116. 書簡によるコンタクトの継続期間についても注意する必要がある。

<sup>35</sup> 事例の抽出にあたっては次の研究を参考にした。"Germania generalis", S. 465-469.

当時の人文主義者たちは、修道院図書館などにおける文献探索に熱中していたが、ツェルティス自身、レーゲンスブルクのザンクト・エメラム修道院でガンダースハイムのロスヴィータの手稿を、バンベルク近郊のエブラッハ修道院でフリードリヒ1世バルバロッサを主題とする叙事詩「リグリヌス」の手稿を発見し、協会を通じて出版した経験をもっている<sup>36</sup>。書簡による情報提供もなされており、例えば1496年にヴォルムス司教ヨハン・フォン・ダールベルクから書簡でフライジングの蔵書について知らされたツェルティスは、それらを実見するために即座に現地に赴いたようである<sup>37</sup>。その他の例としては、フュッセンの修道院を調べた結果について<sup>38</sup>、オロモウツ近郊の古代の遺物に関して当地の司教と話したことについて、弟子たちがツェルティスに報告している書簡もある<sup>39</sup>。

地理に関しては、ツェルティス自身が各地を旅行し、実地に見聞して得た情報に加えて、人的ネットワークを経由した地誌的情報と地図の収集が行われていた。残された往復書簡からは、1500年以降のいくつかの事例を知ることができる<sup>40</sup>。ツェルティスは弟子ペトルス・トリトニウスにアディジェ峡谷の叙述を依頼したようであるが、トリトニウスの1500年の書簡では病気のため仕事できていないとの報告があり、1502年の書簡でもこの件を忘れていないと記されている<sup>41</sup>。別の弟子ジークムント・フォン・ヴィンデックからは、1500年に南ティロールの3つの城塞についての情報が送られた<sup>42</sup>。さらに、1500年にニュルンベルクのゼーバルト・シュライアーから南部ドイツ地図を、1504年に弟子マルティン・シナピヌスからモラヴィア地図を提供されたことが、書簡から知られている<sup>43</sup>。

『ゲルマーニア案内』の本文そのものについて、他の著作家や弟子たちと分担執筆する意図があったかどうかは断定しがたいが、少なくとも執筆を支える調査と資料収集に関しては、交友関係にある人々に協力が要請されていた。また、出版事業を実行する際に、

<sup>36</sup> 前者はザクセン選挙侯フリードリヒの出資を受け「ツェルティス協会」から出版された。後者の出版はアウクスブルクの協会による。Robert, op.cit., Sp.384f.

<sup>37</sup> Rupprich (hrsg. v.), op.cit., Nr.105, S.174-176.

<sup>38</sup> インゴルシュタット大学でツェルティスに師事していたヨハン・フォン・ライテナウからとみられる1493年の書簡。Ibid., Nr.68, S.115f.

<sup>39</sup> ツェルティスによってヴィーン大学内に創設された「詩人と数学者のコレーギウム」の学生であったゲオルギウス・ボーリウス・カエティアヌスからの1504年の書簡。Ibid., Nr.322, S.578.

<sup>40</sup> ツェルティスは、聖年であった1500年を期に、自身の詩作品を出版する構想を抱いていたようである。Robert, op.cit., Sp.399. これに伴い『ゲルマーニア案内』に関わる資料収集活動も活発化したと推測される。

<sup>41</sup> 1500年7月3日付けおよび1502年6月21日付け書簡。Rupprich (hrsg. v.), op.cit., Nr.242, S.404-406, Nr.282, S.511-514.

<sup>42</sup> 1500年9月5日付けの書簡。Ibid., Nr.248, S.416-418. また、ティロールのジークムント公に仕えていたヨハネス・ヤコプス・ア・クルーチェの1502年1月1日付け書簡では、ツェルティスに依頼された南ティロールのノン峡谷についての叙述が仕上がっていないと述べられている。Ibid., Nr.269, S.471f.

<sup>43</sup> ゼーバルト・シュライアーの1500年8月11日付け書簡。Ibid., Nr.246, S.411-414. マルティン・シナピヌスの1504年の書簡。Ibid., Nr.319, S.573-575.

「協会」メンバーの助力を得ることを想定していた可能性も否定できないであろう。

### おわりに

本稿では、ツェルティスの『ゲルマーニア案内』構想を例として、人文主義者たちの学術的・文学的創造活動における人的ネットワークの役割について、「協会」の活動と書簡によるコミュニケーションの2点から把握することを試みた。しかし、小論において提示できたのはその粗描にすぎず、より詳細にその実態を知るには、ネットワークを構成した知識人たちに関するプロソポグラフィ研究をはじめとする広範な調査が必要となるであろう。さらに、書簡等の内容分析を通じて、コミュニケーションの蓄積の中で生じた創造的活動に関わる相互作用を析出してゆくことも求められる。また、『ゲルマーニア案内』構想にみられるような、人文主義的歴史叙述におけるナショナルな意識と普遍性の相克という問題も、他のヨーロッパ諸国の例との比較をも含めて検討されるべき課題である。以上の通り、今後の研究の展開についての見通しを述べて、本稿の結びとする。